

生徒参加型の授業と教師の説明力低下

松井 四郎

1. はじめに

現在の英語教育は「コミュニケーション能力の育成」への流れが加速しさらに変化し続けている。4技能重視の授業、その技能を測る外部試験の大学入試への導入、しかし「英語で授業」は以前ほど話題にならなくなったし、アクティブ・ラーニングも定着したとは言い難い。「最新」理論が紹介され、結局定着しないまま次の最新理論。この変化についていかなければならない生徒たちは本当に大変だろう。技能重視と大学受験指導の両立が困難で、教育現場は混乱している。「使える英語の習得」を目標に掲げることには賛成でも、今、中高生が優先すべきなのは、基礎の定着(語いと基本文法)だと本音では感じている教師も実際は多い。知識不足のために言語活動をしようにもできず、英語力を伸ばせない生徒を毎日見ているからだ。

変革に対応しようとする教員の意欲と不安の表れなのだろうが、研究授業の発表が以前にも増して盛んになった。私は、できる限りこのような機会を利用し、自分とは方法の異なる先生方の授業を参観するようにしている。しかし、最近の授業の傾向に関してはどうしても引っかかることがある。入試制度の変更や生徒参加型の授業が再三話題にされる影響なのか、型にはまった、似通ったような授業ばかりになってきた気がするのには私だけだろうか。要は、1時間の授業に多くの内容(主に言語活動)を入れようとし過ぎて、英語教師の仕事が「指示を出すこと」になってしまい、説明力が低下しているという点が私の懸念である。この問題について考えてみたい。

2. 生徒参加型の授業の特徴と問題点

どの研究授業を参観しても、詳しい指導案が作成され、その流れに沿って授業が行われる。以前は、教師が講義をし、生徒がノートをとる授業形態が主流だった。最近では、様々な形式の生徒参加型の授業

が増えてきた。この授業の特徴は、扱う内容や言語活動が重視され、言語自体について教師が説明する時間が短い点である。授業は50分が一般的なので、できることは当然限られる。最近参観した高校1年の授業では、言語活動の時間を確保するために、文法はまとめのプリントが予め渡され、予習してくるよう指示が出ていた。授業で文法の説明に使われたのは数分のみ。普段の授業を見ているわけではないので断言はできないが、生徒が要点を理解しているようには見えなかった。読解にしても状況は似ており、時間の節約という同じ理由で英文の和訳を前もって渡す教師もいる。このような場合、英文の読み方のプロセスに関する詳しい説明はなく、要約や英問英答等の言語活動が優先されるのが一般的である。

Krashen(1981)は、かつて適切なインプットを与えれば文法の説明は必要ないと主張していた。現在の日本の英語教育では、大学受験の問題もあるため文法が無視されているわけではないにせよ、生徒が英語を聴いたり話したりする機会を増やす点により焦点が当てられている。応用言語学や英語教育の研究者の多くが教室での言語使用を推奨しているが、基礎としての文法や訳読の重要性、教師が英語という言語の特性をわかりやすく説明することの必要性を唱えているのは、大津他(2013)など少数にすぎない。現在は、教師は進行役、生徒が主体の英語教育へと変わりつつある。しかし、少し考えてみればこの方法の問題点が見えてくる。

生徒が教え合うことによって理解が定着するのが生徒主導型の授業の利点の1つとされているが、本当にそうだろうか。答えを出すのと教えるのは本来別々の技能である。英語の得意な生徒が苦手な生徒に何かを教えるにしても、答えの出し方のテクニックのような、表面的な内容が精一杯だろう。英語の学習には、個々の単語・表現・文法項目など細かい部分を積み重ねる側面と、英語という言語を俯瞰的

に見て、どのような規則から成り立っているのかを理解する両方の側面が欠かせない。生徒が苦手な暗記は前者。参考書では別々の項目として扱われているが、前置詞句、不定詞の形容詞的用法、分詞、関係詞節は、日本語と逆で、名詞を後ろから修飾している点を理解するのは後者の例と言える(日本語が head-final language なのに対して英語は head-initial language)。相当英語力が高い生徒でも、的確に教えられる内容はかなり限定されてしまう。言語の深層構造に関する知識があるわけではなく、普段教えてもいないのだから。

言語活動に関しても、基礎力が十分に定着している生徒同士が行うなら確かに成果はあるだろう。しかし、昨年、文部科学省が発表したように、現在の高校3年生の7割近くが中学3年生レベルの英語力しか身につけていない。この状態で言語活動中心の授業をして本当に効果的だと言えるのだろうか。生徒が40名近くいて教師は1人。実際に生徒が何を言っているかをチェックすることもできない。

初期段階の授業では、汎用性が高く次の段階につながる内容を、教師が明示的に説明すべきだと私は考えている。日常生活の中で使う表現と英語の規則を関連付けて教えれば、生徒は興味を持って積極的に授業に参加する。例えば、スーパーの棚に陳列された商品を見ている私の前を、赤ん坊を抱いた母親が横切るとする。このようなとき彼女は **Excuse me.** とは言わない。では、何と言うか?それは何故か?

日本語は名詞の単数・複数を明確にしない場合が多い言語なので、英語では必要な単複の一致を生徒は常に間違えてしまう。上の例でも、文自体に誤りがないと、赤ん坊を抱いた母親は複数だということになかなか気づかない。名詞句・名詞節も、文法上は単数だから動詞が続く場合は一致が必要なのに、教師が説明しなければ生徒はこの点を考えない。講義形式であっても、教師が知的好奇心を刺激する適切な疑問を生徒に投げかければ、一方通行にはならず、理解を定着させられる授業は十分にできる。

生徒に何度説明して練習させてもなかなか定着しないから、教師は日々苦勞している。手持ちの駒(基礎的な知識)がなければ、応用の仕様などない。言語活動の時間を確保するために教師の説明が削除されるのであれば、本末転倒ではないだろうか。

3. 授業に対する生徒の意見を参考にする

現在、中学と高校では同じ英語という教科を扱っているが、授業形態が異なるため進学時に生徒は対応に苦勞する。高校1年の前期の授業は何年経験しても難しい。注意していないと、生徒が知らない用語を無意識のうちに使って授業をしてしまう。少しでもそれを避け授業を効率的に行うため、私はアンケートや面談を行い、中学のときに何をどこまでどうやって習ったかを把握するようにしている。

現在の中学は「コミュニケーション能力の育成」という、文部科学省の方針に沿った形の指導が行われている。教科書は会話文が中心で、様々な形の言語活動に時間が配分され、文法や訳読には比重が置かれていない。しかし、学習指導要領に載っている「目的語」「補語」といった用語でさえ、塾で習ったという生徒を除いて大抵はその意味を知らないのが実状である。教科書の内容も定着しておらず、高校1年は中学英語の復習にかなり時間を取られてしまう。

高校英語は中学英語に比べて格段に難しい。扱う量が増え、内容も相当複雑になる。日本語と英語の言語的な距離や中高生の認知能力の発達段階を考慮すれば、演繹的な説明重視の方法が学校英語には適しているだろう(使う練習は無論必要)。英語と共通点が多いヨーロッパ系の言語を母語とする人に英語を教えるなら、「仮定法」「名詞の単複」等の概念は既に身につけているから時間はかからない。文構造が似ており、単語さえ覚えれば初歩的な会話なら短期間で習得できるという事例も多々報告されている。

私は、文法や訳読の比重が高い高校の授業を生徒がひと通り経験する7月の後半に、中学と高校のどちらの方法が学習しやすく効率的だと思うかを、理由と共に無記名のアンケートという形で答えてもらう。これは正式な調査ではないが、20年近く続けているので実態を把握するには十分役立つ。

ほとんどの生徒が高校のやり方を支持する。理由は明快で、高校の授業は「何故」を説明するからである。中学の授業に対する生徒のアンケート結果はおおむね以下のようにまとめられる。

- ・丸暗記が多く、授業で設定された場面以外では、伝えたい内容を英語で表現できるようにならない。
- ・説明が不十分で、意味がわからないままやられる言語活動は苦痛に感じる。

・学力の高い生徒ほど英語の授業を「遊び」と表現する。努力しなくてもついていってしまうから。

生徒が懸念しているのは、理解が伴っていないので、高いレベルには応用できないという点である。

4. 説明しないと生徒には理解できない英語の特徴

最近、「前置詞の後は名詞」という規則を知らない大学受験生には驚かなくなった。関係代名詞の *that* と接続詞の *that* の区別は、今では難問に分類されるのだろうか。いくら大切なのは内容とはいっても、ことばに規則がある以上、英文として成立しない単語の羅列では情報が正確に伝わらない。

初期段階で説明をし過ぎると、ついていけず英語嫌いが増えてしまう可能性がある。理屈抜きの暗記も遊びの要素もある程度は避けようがない。しかし、言語の規則性を考えない学習法が定着すると、後でそれを修正するのは極めて難しくなってしまう。修正できる生徒は良いが、できなければ大抵は中学レベルで英語の伸びが止まる。だから、英語の構造に関わる規則や、生徒が自分では気づきにくい英語の特徴は、早い時期から教師が説明すべきである。

これは生徒だけに関わる問題ではない。使わない技能は通常退化していく。教師の仕事が指示を出すことになってしまえば、説明能力は必然的に低下する。生徒の声に耳を傾けてほしい。説明をしない、または、説明がわかりにくい教師を彼らは信頼しない。教師は、教科書や参考書を棒読みするのではなく、理解を妨げている要因を特定し、生徒が納得するまで平易な表現や例を使って説明できなくてはならない。以下、例を用いてこの問題を解説する。

初めてのクラスを教えるとき、それが高校1年生であれ高校3年生であれ、浪人生であれ、基礎の大切さを理解させるために、私は以下の問題を最初の授業で使う。予備校時代は医学部を希望するクラスを担当していたが、同じ問題を使った。生徒に質問されたとき、自分ならどう説明するのかを考えてほしい。

問 下線部をたずねる英文を作りなさい。

(1) There are some books on the table.

ここでは、多少の英語の不自然さは問題にしない。以前中学1年の教科書は *I have a pen.* とか *This is a pen.* という文で始まるのが一般的だった。実

生活の中でこんな不自然な英文は使わないという批判があり、自然な英文が採用されるようになっていくのだが、この問題の本質については斎藤・斎藤(2004)がわかりやすく解説している。

テキストで見かける *For here or to go?* という英文は、ハンバーガーショップ等でよく耳にする定型表現で、日本語の「こちらでお召し上がりですか、お持ち帰りですか」に相当する。確かにこれは自然な英語だが、他の状況で使われることはまずない。それに対して、*I have a pen.* なら、動詞の位置が日本語とは違うこと、名詞・目的語の意味、主語・目的語になれるのは名詞だけだということ等、英語という言語の特徴を説明できる。1980年代の半ば、中学1年生に塾で英語を教えていたとき、私は品詞や文型を早い段階で教えていたし、生徒も普通にこなしていた。難し過ぎるという先入観は生徒の可能性を狭めてしまう。

学校英語は母語話者と同等の英語力を目指しているわけではない。教師が説明しやすい英文であれば、多少の不自然さを問題にする必要はないだろう。最初から自然な英語を使いこなせる学習者などいないのだから、差別用語や相手を侮辱する表現なら避けるべきだが、*I have a pen.* であろうと *This is a pen.* であろうと、その後の生徒の英語力の伸びを妨げる要因になるとは考えられない。本題に戻ろう。

本来、中学1年生でも答えられるやさしい問題のように思えるが、実際は、高校生でも浪人生でも大抵間違えてしまう。偶然答えが合っている、理由を説明できる人はほとんどいない。圧倒的に多い誤答は *What are (there) on the table?* である。

何故この文が誤りなのかを、教師なら皆即答できるだろうか。そもそもこのような英文は存在しない。最近では、英語を母語としない人の英語がインターネットなどで氾濫しているせいか、英語使用者が(母語話者も含めて)誤りに対して寛容になっている傾向がある。ここでは、文法書や用例辞典が認めているものを正用法として扱う。生徒が *What are on the table?* という文に違和感がない理由は3つ。品詞に対する意識がない、主語が何かを考えない、主語・動詞の一致に注意を払わないことである。

今の中学生は品詞をほとんど考えない。単語はいくつかの品詞に分かれ、それぞれ働きが異なるという知識もない場合が多い。だから、高校1年生に「前置詞の後は名詞」「主語になるのは名詞」と説明

しても、一部の生徒にはまったく役に立たない。そして、その状態が高校3年まで続く。品詞によって文中の働きが異なるという発想がないのだから、あり得ない語順で単語を並べてもそれが間違っているという判断は当然できない。

There is [are] ~ の表現では、この後の名詞が主語だと見なされている。問題文で動詞が are なのは、その後ろの主語 some books が複数名詞だからである。もしテーブルの上に何があるのかわからなくて、この箇所を what でたずねたら、当然この単語が文の主語なのだが、生徒にはこれを考えるのが難しい。この設問を生徒が間違えてしまう一番の理由は、主語が何かを意識しないからである。主語を特定できたとしても、それだけではまだ正解を導けない。英語では、主語の名詞の単数・複数がわからないと動詞の形が決められない場合が多い。ここで what が文法上、単数なのか複数なのかが問題になる。疑問代名詞の what, who, which は文法上すべて単数。従って、What is (there) on the table? が正解。

説明してしまえば何でも無い問題に思える。しかし、前述したように、結果的に医学部に合格するような浪人生でも、4月の段階ではほんの一部しか正解できない。what, who, which は名詞の仲間原則として主語、目的語、補語のいずれかになり文法上は単数だということは少し教えるだけで理解できるし、他の項目を扱う際にも広く応用できる規則なのだから、早い段階で教えるのが得策だと個人的には思う。だが、タスクを用いた言語活動で英語の基礎を定着させるべきだという意見が現在では主流になっている。

ここでは詳しい説明には触れないが、疑問代名詞が主語で一般動詞の場合は、さらに複雑な問題が生じる。疑問代名詞が主語なら動詞が後続するのに、目的語なら Wh- do(es) SV? という形になる。

(2) Who goes to the party with him?

(3) What do you want to do?

言語活動中心で品詞も文型も教えないなら、この違いをどうやって説明するのだろうか。(4)の文の下線部をたずねる文を生徒に作らせると、Who do(es) go to the party with her? という誤答が多い。

(4) Mike and Bob go to the party with her.

問題の本質は高校でも中学でも変わらない。英語

に興味がある生徒は常に「何故」を考えるので、高校教師には、さらに複雑な内容をわかりやすく説明する能力が要求される。生徒が一番嫌がるのは途中で教え方が変わってしまうことだ。中学までの方法が高校に入学した途端に否定されたりもする。中高の英語教師が密に連絡をとって一貫性を持たせられないだろうか。

5. まとめ

誤解されないように断っておくと、私は海外生活が比較的長く(アメリカに8年)、7年は大学院だったので、4技能をバランスよく使ってきた。コミュニケーション英語が苦手ではないし、大学受験しか念頭にないわけでもない。言語学・言語習得理論・教授法は随分時間をかけて学んだ。それでも私が文法や明示的な説明を重視するのは、現在の言語活動を基盤とする学習法は欧米社会を軸に発達したもので、日本の言語環境との違いを十分に考慮しておらず、理論的妥当性が十分とは言えないと感じるからである。今まで、高い英語力を身につけた日本人に会うたび、彼らの学習法についてしつこいくらいに質問してきた。共通しているのは、基礎を決して疎かにせず、根気よく語いを増やし、文法を徹底的に学び、その上で、実践の中で英語を使う練習を繰り返したという点である。基礎力の有無がその後の英語力の伸びの差を作る例を私は何度も見てきた。生徒の知識不足や教師の説明力の低下が、英語力のさらなる低下をもたらさないか不安で仕方がない。

参考文献

- Krashen, S. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon.
- 前田育穂. (2015, 12月17日). 「生徒が主体的に学ぶAL推進計画, 高校の1割」 p.10. 東京: 朝日新聞.
- 文部科学省. (2017). 「平成29年度 英語力調査結果 (高校3年生)の概要」 <http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf> (2018年7月17日)
- 大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子. (2013). 『英語教育, 迫り来る破綻』 東京: ひつじ書房.
- 斎藤孝・斎藤兆史. (2004). 『日本語力と英語力』 東京: 中公新書ラクレ.